塩ビ管尺八

独特の音色へ 和の世界へ

慣れない楽器に苦戦

県立大生が遊学舎で体験

塩化ビニール製の水道管で作った〝尺八〟で、童謡や民謡を演奏しよう！。県立大の学生たちが十日、秋田市上北手の遊学舎で手作り尺八の演奏にチャレンジした。学生たちは音を出すだけでも難しい未知の楽器に悪戦苦闘しながらも、和の世界に浸った。

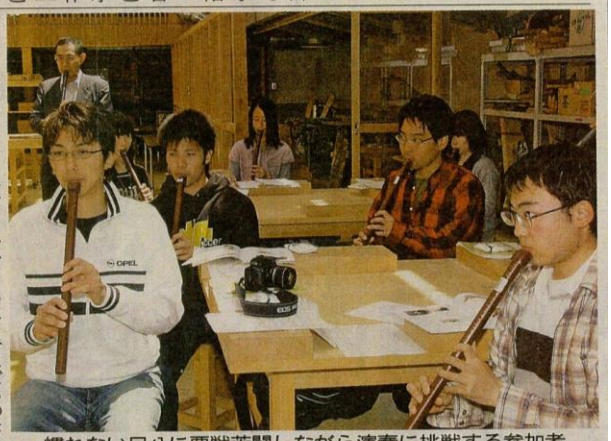
「遊び」を通じ学生の社会性を育てようと、同大が昨年スタートさせた「薫風・満天フィールド交流塾」の活動の一環。生物資源科学部一―三年生の九人と教職員三人の計十二人が参加した。指導に当たったのは、県三曲連盟副会長の小玉苑山さん(七三)。小玉さんは、遊学舎で尺八サークルの講師を四年余り務めており、この活動を企画した同大総合科学教育研究センター教授の高階悟さん(五九)も弟子の一人だ。

尺八は高価なため、入門者は塩ビ管製の尺八を練習用として使用するのが一般的。小玉さんはまず塩ビ管尺八の作り方を指導。市販の水道管二本を接続用の「ジョイント」という短い管と接着剤でつなぎ、のこぎりで二つに切断。ジョイントの切断面周辺を電動グラインダーやヤスリで削り、吹き口を仕上げた。さらに電動ドリルで表に四つ、裏に一つの穴を開け、完成させた。

その後は、あらかじめ用意された完成品の塩ビ管尺八が参加者に配られ、学生たちは音出しに挑戦。うまく音が出せず、息を吐く音しかできない学生が多い中、小玉さんが「口を閉じた状態から唇を薄く横長に開き、静かに長く息を吐き出して」とアドバイス。次第に学生たちの尺八から独特の音色が鳴りだした。

指の押さえ方や基本となる音階を学んでから、学生たちは童謡「春の小川」の演奏に挑戦。小節ごとに区切ってしばらく練習した後、楽曲全体を通した演奏も。指使いがまだぎこちなく音にばらつきもあったものの、おなじみのメロディーが会場に響き渡っていた。

中学、高校時代は吹奏楽部に所属する近藤善香さん(二〇―二年)は、「ずっとホルンをやってきたが、尺八は音の出し方がまったく違う。戸惑いもあったが、楽しかった。もっと練習して曲が演奏できるようになりたい」と満足そうだった。



小玉さん（右から2人目）の塩ビ管尺八の製作実演を真剣に見つめる参加者

慣れない尺八に悪戦苦闘しながら演奏に挑戦する参加者

2008.5.12　秋田魁新報